

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 3

鉢伏 2・3 号窯址灰原発掘調査概報

1990

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

小曾原は、良質の陶土や薪炭材が豊富で、古くから窯業が盛んでありました。丹生古窯跡群と呼称されている須恵器の窯跡も確認されています。また鎌倉時代以降には、甕器系中世陶器に分類される越前焼の窯跡が多数見出されています。

今回の調査地の鉢伏山北斜面にも窯跡がいくつか遺存していましたが、山裾に農免道路の建設が計画され、2基の灰原にかかることになりました。事前の発掘調査で、予想通り大量の遺物が出土しました。須恵器片がコンテナバット 600箱ほどもあり、整理は終了していませんが、とりあえずこれまで判明した成果の概要を報告する次第です。

出土した土器は、壺、甕、坏、碗、皿、鉢と種類も多く、それらの中のセット関係や法量なども分析しています。また法量分化の整理縮小や重ね焼の仕方の相違などから、須恵器生産体制の変化も考察しています。さらに須恵器の編年や実年代、須恵器と灰釉陶器との併行関係についても検討を加えています。

遺物全体の整理が終了した段階で修正される部分も生じると存じますが、早急に調査資料を一般に公開するため概報を刊行した次第です。いささかでもお役に立ちますればさいわいに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査を実施するに当たり温かいご配慮ご協力を賜りました関係機関の方々、ならびに発掘調査に従事されました皆様方に、心から厚くお礼申し上げます。

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 藤 原 武 二

例 言

1. 本書は、福井県丹生郡宮崎村小曾原に所在する鉢伏2、3号窯址灰原に関する発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、昭和63年6月13日～10月13日にかけて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが行った。
3. 本書の作成にかかる遺物整理は、平成元年4月1日～平成2年3月31日にかけて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにおいて行った。
4. 本書の執筆および編集は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財調査員水村伸行が行った。
5. 発掘調査から本書の作成に至るまでに下記の諸機関、諸氏に御協力及び御教示頂いた。記して厚く御礼申し上げます。

福井県陶芸館、武生市教育委員会、宮崎村教育委員会、青木豊昭、宇野隆夫、木立雅朗、北野博司、久保智康、白崎卓、田嶋明人、田中照久、林憲司、望月精司、(故)水野久右衛門

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 地理的および歴史的環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
第Ⅲ章 灰原の調査と遺物	9
1 2号窯灰原	9
2 3号窯灰原	27
第Ⅳ章 総 括	46
1 法量分化と規格性	46
2 重ね焼き	51
3 編年の位置づけ	52

図版目次

図版一	上：調査前遠景 下：調査前近景
図版二	上：3号窯址灰原セクション 下：調査終了後近景
図版三	出土遺物
図版四	出土遺物

挿 図 目 次

第1図	福井県における宮崎村の位置図	2
第2図	周辺の遺跡分布図	3
第3図	江波1号横穴墓実測図	3
第4図	神明ヶ谷1号竪穴出土遺物実測図	5
第5図	上長佐1号竪穴出土遺物実測図	5
第6図	上長佐5号竪穴実測図	7
第7図	江波経塚群出土遺物実測図	7
第8図	灰原周辺地形測量図	10
第9図	グリッド配置図	10
第10図	2号竪穴灰原セクション図	11
第11～22図	鉢伏2号竪穴出土遺物実測図	15～26
第23図	3号竪穴灰原セクション図	28
第24～38図	鉢伏3号竪穴出土遺物実測図	31～45
第39図	鉢伏2号竪穴出土蓋法量図	46
第40図	鉢伏3号竪穴出土蓋法量図	46
第41図	鉢伏2号竪穴出土環A法量図	47
第42図	鉢伏3号竪穴出土環A法量図	47
第43図	鉢伏2号竪穴出土環B法量図	47
第44図	鉢伏3号竪穴出土環B法量図	48
第45図	鉢伏2号竪穴出土皿A法量図	48
第46図	鉢伏3号竪穴出土皿A法量図	48
第47図	鉢伏2号竪穴出土皿B法量図	49
第48図	鉢伏3号竪穴出土皿B法量図	49
第49図	鉢伏2号竪穴出土椀B法量図	49
第50図	鉢伏3号竪穴出土椀B法量図	50
第51図	鉢伏2号竪穴出土陶鉢法量図	50
第52図	鉢伏3号竪穴出土陶鉢法量図	50
第53図	鉢伏2、3号竪穴重ね焼き模式図	51
第54図	村国遺跡第Ⅳ次調査Ⅰ区A南地区第2層出土遺物実測図	53

第 I 章 調査に至る経緯と経過

越前焼の村として知られている宮崎村には越前焼の窯址はもちろんのこと、それ以前の須恵器の窯址も含めて実に多くの窯址が確認されていたのであるが、頻繁に行われる開発行為により事前調査も行われずに多くの窯址が消滅していった。今回報告する鉢伏 2、3 号窯址も危うく他の多くの窯址と同じ運命を共にする所であった。このことは、開発者側が計画段階において文化財側に文化財の取扱についての紹介を行うという常識が福井県において定着していないことに起因するものである。

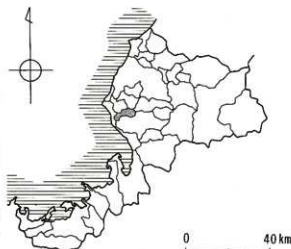
昭和62年10月、県文化財保護審議会委員であった（故）水野九右衛門氏より、宮崎村小曾原において行われている農免道路建設事業において窯址 2 基の灰原が削られることの連絡を受けた県文化課は、県耕地課及び丹生耕地事務所と協議を開始する一方、現地確認を行った。12月、2 回目の耕地課との協議において、調査は昭和63年度に実施し 8 月31日までに完了する。又、調査費用は3,000,000円とすることに決定された。ここで、どのような根拠から調査費3,000,000円としたのかは後の調査担当者となった筆者は知り得ないが、このことが後の調査に多大な影響を与えたことは事実である。昭和63年 4 月、調査費用3,229,000円を耕地課へ提示、5 月30日覚書締結。

6 月13日に発掘調査を開始した。調査は下草刈から始め、2×2m グリッドを設定した後掘り下げを開始すると同時に調査区内の地形測量を行った。しかし、灰原の堆積も厚く遺物量も多いことから、当初の調査費用内では調査終了は難しいと判断されたため、6 月末に丹生耕地事務所と連絡を取り、7 月 1 日に現地立会いを要請したが天候に恵まれなかったことから、7 月15日まで延期せざる得なかった。その間現場では、3 号窯灰原の層位が極めて複雑な様相を呈していることが判明し、遺物の取り上げには細心の注意を必要とした。丹生耕地事務所による立会いの後、7 月25日に丹生耕地事務所、7 月27日には県耕地課において遺物整理費を含む11,635,000円の補正予算を提示した。その後、補正予算を巡り協議が難航したことから 9 月 1 日より発掘調査を一時中止せざる得なくなった。県耕地課との協議は継続して行われており、10月 5 日農林水産省北陸農政局において県文化課、県耕地課を含む 3 者協議が行われ、予算の増額が認められたことから10月 7 日より発掘調査を再開し、10月13日に完掘写真を撮影し現地作業を終了した。

第II章 地理的および歴史的環境

1. 地理的環境

鉢伏窯跡は、福井県丹生郡宮崎村小曾原に所在する。丹生郡は越前国の西部に位置し、清水町、朝日町、織田町、越前町、越廼村、宮崎村の4町2村から構成されており、面積は211.73 km^2 である。このような中で宮崎村は丹生郡南部に位置し、(第1図)丹生山地の底部にあたり、山間に展開される小盆地に集落が散在し、面積は33.8 km^2 である。また、村のほぼ中央に位置する村役場は、北緯35度56分、東経136度4分を測る。丹生郡の大部分を占めている丹生山地とは、西側は日本海に東側は福武低地に限られた、武生南部を東西方向に

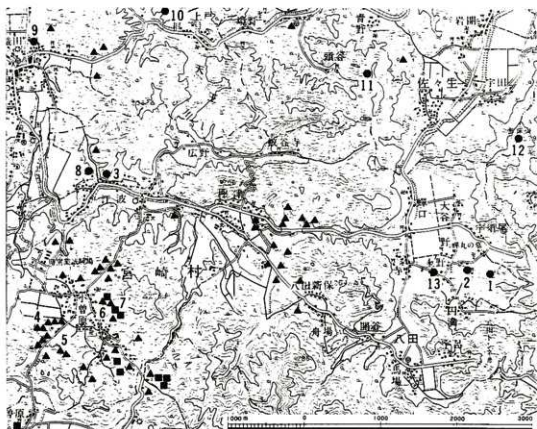


第1図 福井県における宮崎村の位置図

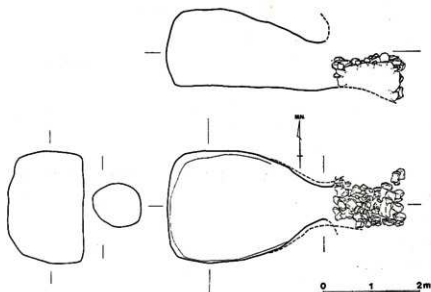
流れる吉野瀬川断層以北の山地を指している。本山地は一般に日本海に向かって急傾斜し、東方へ向かって緩やかに高度を下けている。本山地中には北部の一部を除き、小盆地が数多く存在しており、宮崎村内においても小曾原、榎津、江波、広瀬などの小盆地が存在している。河川は、これらの小盆地間を複雑な流路をとって流れている。そして、いずれもこれらの小盆地の周辺には、明らかに区別できる2～3段の河岸段丘がよく発達しており、段丘にはいずれも基底に厚い礫層が発達している。また、小曾原および織田付近では粘土層の発達が良好である。

2. 歴史的環境

現在、宮崎村内においては旧石器時代に属する遺物は報告されておらず、もっとも通り得る資料でも、宇須尾の通称さんじ山(第2図1)で採集されている縄文時代前期に属する土器および石器である。土器は小片⁽¹⁾が数個採集されているのみで詳細は不明であるが、石器には石斧、石鐮、石匙が含まれている。採集地点は、西へ伸びる舌状台地の北側斜面であり、標高は約50mを測る。弥生時代の遺跡は確認されておらず、断片的な遺物も採集されていない。続く古墳時代の遺跡のうち集落跡と想定される遺物散布地は不明であるものの、古墳および横穴墓の存在が確認されているという事実からすると、将来、集落跡が確認される可能性は極めて高いものと考えられる。古墳は過去において、宇須尾に所在する平地へ突き出た舌状台地上(第2図2)において確認されたという⁽³⁾が、現在では消滅している。横穴墓群は江波西ノ上地籍に所在し、(第2図3)天王川左岸の段丘上で標高100m付近の地形変換線上に位置する。1976年に「宮崎村誌」編さん事



第2図 周辺の遺跡分布図



第3図 江波1号横穴墓実測図

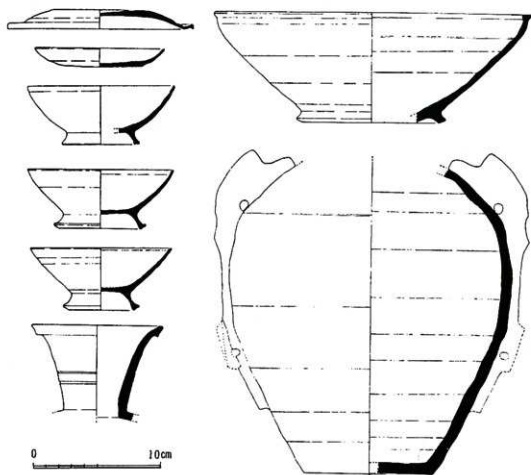
業の一環として発掘調査がおこなわれており、確認された6基のうち2基が発掘調査されている。⁽⁴⁾

1号横穴墓(第3図)は、横穴墓群の中でも、もっとも南側に位置している。羨道と玄室の区別は明確でなく、玄門からなだらかに広がる隅丸の逆台形を呈する玄室を有する。主軸は東西方向であり、東側に向かって開口している。全長3.6m、最大幅2.36m、最大高1.6mを各々測る。

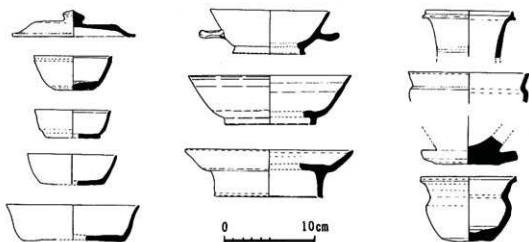
2号横穴墓は、後世における改変が著しく、玄室の右側奥に更に一部部屋を有している。羨道と玄室の区別は、左側壁に明瞭に現れており、片袖式と考えられる。後世における改変を除外して造営時の形態を想定すると、基本的には1号横穴墓に類似した逆台形を呈していたものと考えられる。主軸はほぼ東西方向であり、全長3.2m、最大幅約2m、最大高約1.2mを各々測る。出土遺物は、1号横穴墓から後世の混入品が若干量出土したのみであり、本横穴墓群の造墓時期を知り得るものは皆無であった。

奈良、平安時代の遺跡のうち、宮崎市内において顕著に存在が確認されるのは須恵器窯址である。これらの窯址は、宮崎村、織田町および朝日町所在の窯址群を含めて、丹生古窯址群と呼称されている。また、武生南部窯址群をも包括して南越古窯址群と呼ぶあいもある。丹生古窯址群に限ってみれば、過去に最低61基⁽⁷⁾が確認されており、おそらくは総数100基以上を有する須恵器窯址群であったと相定される。これらの中で窯体、灰原ともに発掘調査がおこなわれたのは神明ヶ谷1号窯址(小曾原1号窯址)のみであり、上長佐支群の調査ではトレンチ調査により上長佐1号窯址(小曾原16号窯址)の灰原および、上長佐2号窯址の窯体が確認されている。また、今回報告する鉢伏2、3号窯址は(第2図4)である。神明ヶ谷1号窯址(第2図5)は、1965年に名古屋大学を中心として発掘調査がおこなわれており、全長9.3m、最大幅1.2mを測る半地下式の登り窯であり、窯体の上方には、排水溝と想定される馬蹄形を呈する溝状遺構を有する。報告書が未刊行であるため詳細は不明であるが、田中照久氏により若干の資料が紹介されており⁽⁹⁾(第4図)南越古窯址群における須恵器編年の一様式となっている。⁽¹⁰⁾なお、所属年代は10世紀前半と考えられている。上長佐1号窯址、同2号窯址(第2図6)は、1975年に名古屋大学を中心として、上長佐3～6号窯址の発掘調査をおこなった際に設定したトレンチにより、1号窯址の灰原および2号窯址の窯体が確認された。上長佐1号窯址(第5図)は、先述した神明ヶ谷1号窯址と同様に、南越古窯址群における須恵器編年の一様式となっており、8世紀末に位置づけられている。上長佐2号窯址の内容については、遺物量が少なく判然としないが、一応9世紀前半の中で位置づけておきたい。⁽¹¹⁾以上が発掘調査により確認された須恵器窯址であるが、これらに付随すると想定される粘土採掘坑跡、工房跡および工人の生活の場であった集落跡などは不明であり、平地における遺物散布地も確認されていない。

鎌倉時代以降の遺跡としては、窯址、経塚、城館などが確認されている。窯址は先述した須恵器に変わり、瓷器系中世陶器第4類に分類される越前焼のものである。現在までに約200基が確認されているものの、発掘調査がおこなわれたのは、上大師1号窯址、奥堂ノ谷1号窯址、上長佐3～6号窯址(第2図7)、水上1～2、4～5号窯址および6号窯灰原、岳ノ谷1～3号窯址で



第4図 神明ヶ谷1号窯址出土遺物実測図



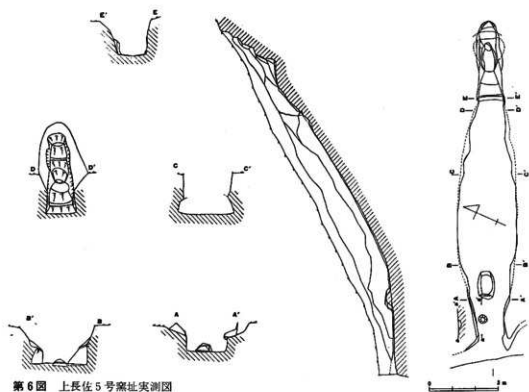
第5図 上長佐1号窯址出土遺物実測図

ある。これらのうち上長佐支群以外は、第2図に示した須恵器窯址群より西側に展開しているため図中には示されていない。上長佐支群は、先述したように1975年に発掘調査がおこなわれており4基が発掘調査されている。このうち遺存状態のもっとも良好であった5号窯址(第6図)は、全長14m、最大幅2.6mを測り、分焰柱を有する。また、窯体内部からの出土遺物は、ほとんど認められなかった。発掘調査された4基の相対的序列は、3→4→6→5号窯址の順であると考えられており、特に3号窯址には1180年頃という絶対年代が与えられている。

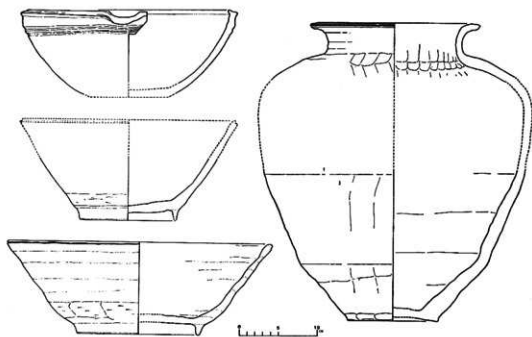
経塚は4ヶ所が知られているが、発掘調査がおこなわれたのは『宮崎村誌』編さん事業の一環として1976年に調査された江波経塚群(第2図8)のみである。江波経塚群は江波字大門に所在し、丘陵端から派生する尾根の東斜面、標高108.7~109.9m付近に位置する。分布調査により6基が確認され、2、6号経塚が発掘調査された。2、6号経塚ともに盗掘を受けており、内部構造などの詳細は不明である。出土遺物(第7図)は、土師器、須恵器、越前焼、常滑焼、珠洲焼などであり、越前焼の生産地であるにもかかわらず、常滑焼、珠洲焼が比較的多く出土していることが注目される。これらの経塚は、13世紀代のものと考えられる。

中近世城館は、(第2図9~13)の5ヶ所が確認されている。青野城(11)は、南北へ走り標高約170mを測る尾根上に位置する。南北長径130m、東西幅約60mを測り26余りの小郭を有するが、明確な所属年代は不明である。

- (1) 『宮崎村誌』上巻 宮崎村 1984年
- (2) 敦賀郷土博物館に収蔵されている。『宮崎村誌』上巻 宮崎村 1984年
- (3) 青木豊昭氏の御教示による。
- (4) 『江波横穴墓群の調査』『宮崎村誌』上巻 宮崎村 1984年
- (5) 田中照久「丹生古窯跡群」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988年
- (6) 田中照久「南越古窯址群」『福井県史』資料編13 福井県 1986年
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) 斉藤優「神明ヶ谷の須恵器窯跡」『福井県文化財調査報告』第21集 福井県教育委員会 1971年
- (9) 『上長佐古窯跡群発掘調査報告書』宮崎村教育委員会 1977年
- (10) 注(9)に同じ
- (11) 田中照久「越前・若狭の須恵器窯」『福井県窯業誌』福井県窯業誌刊行会 1983年
田中照久「宮崎村の須恵器窯址」『宮崎村誌』上巻 宮崎村 1984年
注(5)・(6)に同じ
- (12) 注(6)に同じ。
- (13) 注(6)に同じ。



第6図 上長佐5号窯址実測図



第7図 江波経塚群出土遺物実測図

- ⑭ 檜崎彰一『日本の陶磁』3 中央公論社 1974年
- ⑮ 『水上古窯跡群発掘調査報告書』宮崎村教育委員会 1980年
- ⑯ 注(8)に同じ。
- ⑰ 水野九右衛門「中世の越前古窯」『福井県窯業誌』福井県窯業誌刊行会 1983年
- ⑱ 注(9)に同じ。
- ⑲ 注⑬に同じ。
- ⑳ 『水上古窯跡群発掘調査報告書』宮崎村教育委員会 1981年
- ㉑ 注㉒に同じ。
- ㉒ 注⑬に同じ。
- ㉓ 注㉒に同じ。
- ㉔ 吉岡康暢・他『東日本における中世窯業の基礎的研究』国立歴史民俗博物館 1989年
- ㉕ 「江波の経塚群」『宮崎村誌』上巻 宮崎村 1984年
- ㉖ 『日本城郭大系』11 新人物往来社 1980年

第三章 灰原の調査と遺物

鉢伏2、3号窯跡は鉢伏山の北斜面、標高137~140m付近に位置する。周囲は農道および水田化が進んでおり、灰原の存在する斜面も灰原を避けるように掘削が進み、灰原が農道へ突出する形となっている。

今回の調査は窯体が未調査であることから、灰原の主軸を窯体に求めることができず、灰層の堆積のもっとも厚いと想定された3号窯灰原6ライン(第9図)を主軸として設定した。グリッドは2×2mとし、縦列は斜面上方より南から北へA~E列、横列は東から西へ1~24列とし、縦横の組合せにより、1A、1B、1Cグリッドと呼称した。発掘調査は、灰層の堆積が厚く分層が可能なグリッドについては、層位別に取り上げたが、灰原の末端部に近く灰層が薄いグリッドについては、まとめて取り上げをおこなった。

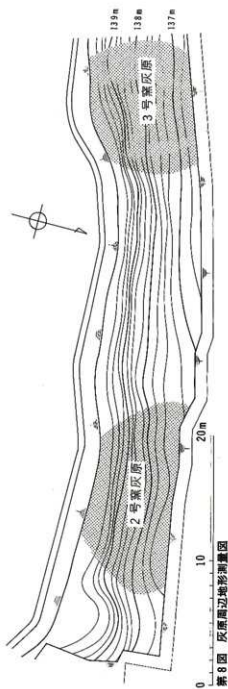
1. 2号窯灰原

A. 層位(第10図)

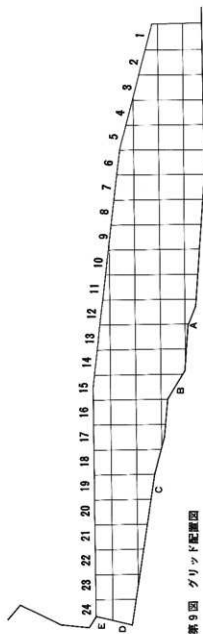
灰原の遺存状況は、末端部が農道により削り取られていた以外は良好な状態であった。調査範囲における最大幅は、グリッド列によるB列で15mを測ることができ、また、深さは16Bグリッドで最大1.3mを測る。本灰原は、グリッド列15~21列を中心とした凹状を呈した地形を利用しており、この凹状は最大で70cmの比高差を測る。灰層の堆積状況は凸レンズ状を呈していた。1層は暗茶褐色土であり、ロームブロックなどを少量含み、グリッド列C列による観察によれば9C付近までその堆積が続いている。また、9~10Cにおいては3号窯灰原上層の上に堆積している。本層は遺物を少量含むのみであることや、堆積状況などから後世に上方より流れ込んだものと考えられる。2層は黒褐色土であり、炭および粘土を多く含み、ブロック状を呈しているものも認められる。しかし、遺物量は少ない。グリッド列16、17列においての観察によると、灰層末端部にまで伸びている。3層は、2層と同じく黒褐色土であるが、2層に含まれていた粘土ブロックはまったく含まず、炭もブロック状を呈したものは含んでいない。遺物量も少ない。4層は黒色土であり2層と比して粘土ブロックは少ない。しかし遺物量は多く、本灰原出土の多くは本層から出土したものであり、識別はし得なかったものの更に数層に分層できる可能性がある。5層は赤褐色土である。焼土層であり、焼成不良の遺物を多量に含む。グリッド列B列による観察では、幅3.4m、厚さ15cmを測る。窯体と灰層の関係は不明であるが、本層は窯体築窯後の極めて早い時期の所産であると想定され、本層より出土した遺物には極めて限定された時間的まとまり(おそらくは、同時焼成)を与えることができるものと考えられる。

B. 出土遺物(第11~22図)

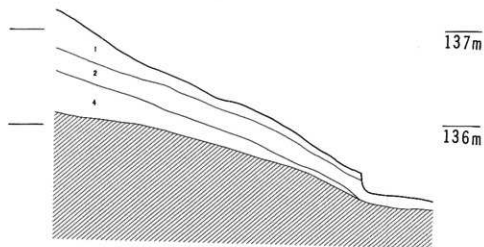
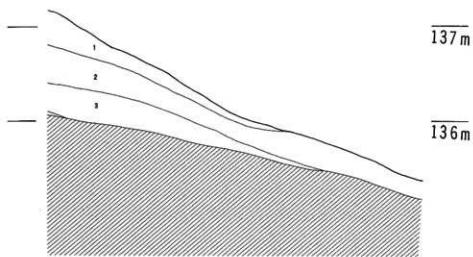
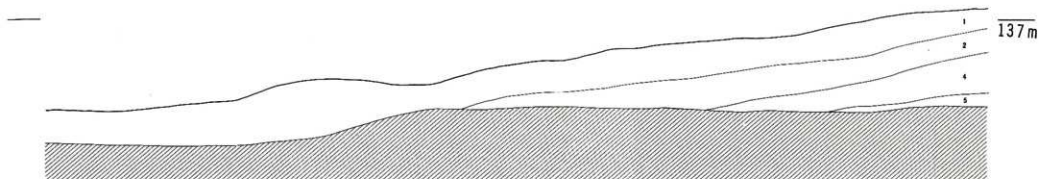
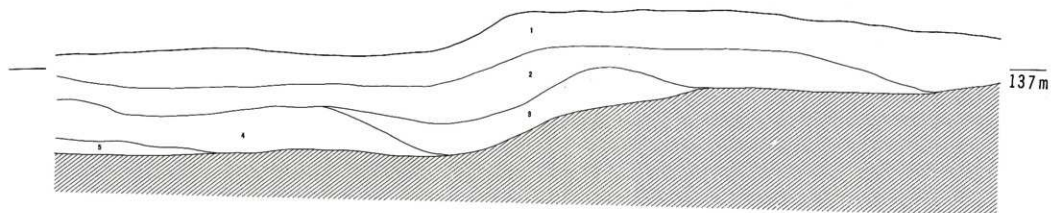
先述したごとく遺物の取り上げに際しては、分層可能なグリッドについては層位別に取り上げ



第8図 灰原周辺地形測量図



第9図 グリッド配置図



- 1層 暗赤褐色土 粘土粒を多く含むが遺物は少ない。
 2層 黒褐色土 遺物は極めて少ない。
 3層 黒褐色土 遺物は多く含む。
 4層 黒色土 粘土粒をやや多く含む。遺物は多く含む。
 5層 赤褐色土 焼土層であり、焼成不良品を多く含む



第10図 2号遺址灰層セクション図

を行ったが、今回報告する概報においては充分それが生かされていない。この点については筆者のもっとも遺憾とするところである。また、出土した遺物のうち約半数が未整理のため、すべての器種を網羅しているわけではないことを予めお断りしておきたい。

蓋(1~53) 蓋のうち(1~48)は、坏Bおよび碗Bとセット関係を持つものである。これらの中で最大のものは口径22cmを測る(1)であり、器高は1.8cmを測る。(2~11)は口径18~20cmを測るものであり、器高はまとまりに欠くものの1.2~2.6cmを測る。しかし、これらは焼き垂みを含んだものであるため、製品としての器高は1.6~2cmを測るものと想定される。(12~48)は口径13.3~17cmを測るものであり、器高は1~2.5cmを測る。これらの器高も焼き垂みを含むものであり、製品としての器高は1~2cmを測るものと想定される。これらの調整技法は、頂部は回転ヘラ切りののち不定方向のナデ調整を行い、体部内外面ともに回転ナデ調整を行うが、頂部の不定方向のナデ調整を省略するものも認められる。また、内面中央部には仕上げナデ調整している。頂部には調整終了後、製品を裏返して乾燥させた際に生じたと考えられるスノコ状の圧痕が多数の製品に認められる。(49~51)は短頸壺(奈良国立文化財研究所による分類の壺A)の壺であり、(49~50)は小破片であるために銚を欠失しているが、本来は(51)と同様の形態を呈するものと考えられる。口径は(50)で16.2cm、(51)で12.6cmを測り、器高は(51)で5.4cmを測る。調整は、天井部および体部内外面ともに回転ナデ調整したのち、天井部内面を仕上げナデ調整する。(52)は口径24cm、器高4.7cmを測るもののセット関係は不明である。頂部を回転ヘラ削り調整したのち、体部内外面ともに回転ナデ調整を行い、内面中央に仕上げナデ調整を行う。また、銚は頂部回転ヘラ削り調整ののち、接着を行っている。この際に接着面を回転ナデ調整し、痕跡を消している。(53)は口径14.6cm、器高3.1cmを測る。頂部から体部内面にかけては回転ナデ調整するが、内面中央は幅広く不定方向のナデ調整する。

坏A(54~107) (54~91)は口径12~15.7cmを測り、器高は2.4~3.7cmを測る。底部は回転ヘラ切りにより切り放されており、その後、不定方向の雑なナデ調整するものも認められる。体部は内外面ともに回転ナデ調整を行い、底部内面中央を仕上げナデ調整する。又、底部外面には調整終了後、製品を乾燥させた際に生じたと考えられるスノコ状の圧痕が多く認められる。(92~107)は口径7.5~9cmを測り、器高は2.2~3.5cmを測る。底部は回転ヘラ切りにより切り放されており、その後、不定方向の雑なナデ調整するものも認められる。体部は内外面ともに回転ナデ調整を行い、底部内面中央を仕上げナデ調整するものを基本とするが、仕上げナデ調整を省略するものも認められる。

坏B(108~145) (108)は坏Bの中で最も大形のものであり、口径18cm、器高5.5cmを測る。内面端部を接地面とする高台を体部と底部の境に有する。(109~139)は口径14~16cmを測り、器高は3.9~5.7cmを測る。高台の付く位置は先述したものと同じである。高台の形態は、内面端部を接地面とするものを基本とするが、その他のものとして高台底面全体を接地面とするものも小数認められる。(140~145)は口径11.6~12cmを測り、器高4~4.5cmを測る。高台の形態は先述

したものと同様であるが、高台の付く位置は体部と底部の境とするもの(140, 142~144)と、体部と底部の境よりやや内側に付くもの(141, 145)の2種が認められる。体部は内外面ともに回転ナデ調整を行い、内面中央には仕上げナデ調整する。底部は回転ヘラ切りにより切り放されたのち、高台を接着し、高台および底部外面を回転ナデ調整するものを基本とする。しかし、底部外面の回転ナデ調整を省略し、高台部のみに回転ナデ調整するものも認められる。

皿A(146~181) 皿Aは口径14~16cm、器高1.7~2.6cmを測る。底部と体部の境には、しばしば凹状の強い押え込みの痕跡が認められる。体部内外面ともに回転ナデ調整を行い、底部内面中央には仕上げナデ調整する。底部は回転ヘラ切りにより切り放されており、調整終了後、製品を乾燥させた際に生じたと考えられるスノコ状の圧痕が多く認められる。

皿B(182~185) (182)は口径15cm、器高4cmを測り、高台は高く1.8cmを測る。(183)は口径13cm、器高3.2cmを測り、高台は(182)と同様に高く1.4cmを測る。(184)は口径12cm、器高2.4cmを測り、(185)は口径13cm、器高2.5cmを測る。(184~185)は、(182~183)が高台の高い断面長方形の高台を有するのに対し、高台の低い断面方形を呈する高台を有している。調整は、体部内外面ともに回転ナデ調整を行ったのち、底部内面中央を仕上げナデ調整する。又、底部外面は高台接着後、回転ナデ調整する。

碗B(186~193) (186~191)は口径17.8~20cmを測り、器高6.3~7.4cmを測る。(192)は口径16cm、器高5.4cmを測り、(193)は口径16cm、器高6cmを測る。高台は高く、体部と底部の境に接着されており、接地面が肥厚するものも認められる。調整は体部内外面ともに回転ナデ調整を行い、底部内面中央を仕上げナデ調整する。また、底部外面は高台接着後、回転ナデ調整を行い底部切り放し痕を消している。

大平鉢(194~206) 口径27~30cm、器高9.7~10.2cmを測る。高台の形態には断面が平行四辺形を呈するものと、長方形を呈し接地面が肥厚するものの2種類が認められ、これらは体部と底部の境に接着されている。体部は内外面ともに回転ナデ調整を行い、底部内面は仕上げナデ調整、底部外面は高台接着後に回転ナデ調整を行っている。

鉢(217~218) (217)は口径38.6cmを測り、外面はタタキ目、内面には同心円文の当て具痕を残す。(218)は口径8.6cm、器高8.5cmを測る。体部内面は回転ナデ調整するが、外面は縦方向の雑なナデ調整を行っている。

壺(207~208) (207)は口径12.6cm、器高17.5cmを測る。底径の大きな底部より立ち上がった体部は弓張り状に伸び、頸部で外上方へ屈曲し口縁部へ至る。底部内面から体部内面下端へかけては工具による押え痕が僅かに認められ、体部外面下端は不定方向の雑なナデ調整するほかは、回転ナデ調整する。(208)は口径6.5cm、器高15.1cmを測る。口縁部周辺は横ナデ調整するが、体部は回転ナデ調整を主として部分的に斜方向のナデ調整する。

長頸壺(209~211) 口径10.2~11cm、器高23.4~25.6cmを測る。頸部、体部、底部各々別に作り接合している。口縁部は肥厚させたのち、下方へ折り返している。頸部、体部、底部ともに

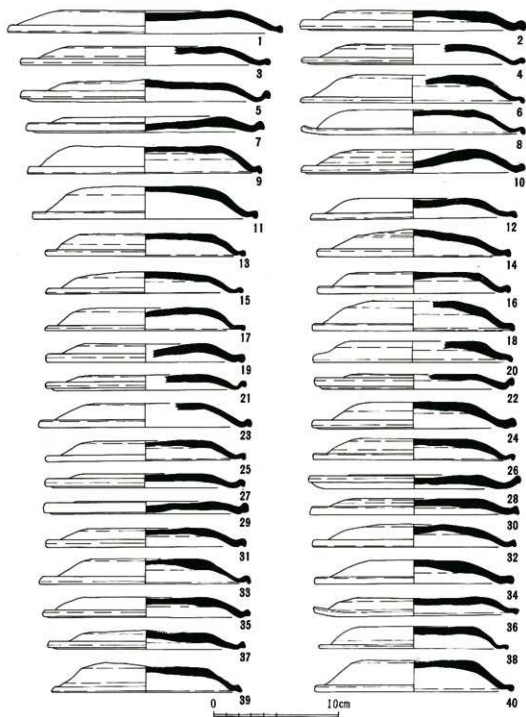
回転ナデ調整する。図示したもの全てに耳を有していないが、肩部の破片の中には耳を有するものが多く認められる。

短頸壺（212） 口径13.6cmを測る。口縁部は肩部よりほぼ直線的に立ち上がり端部は丸く収める。内外面ともに回転ナデ調整する。

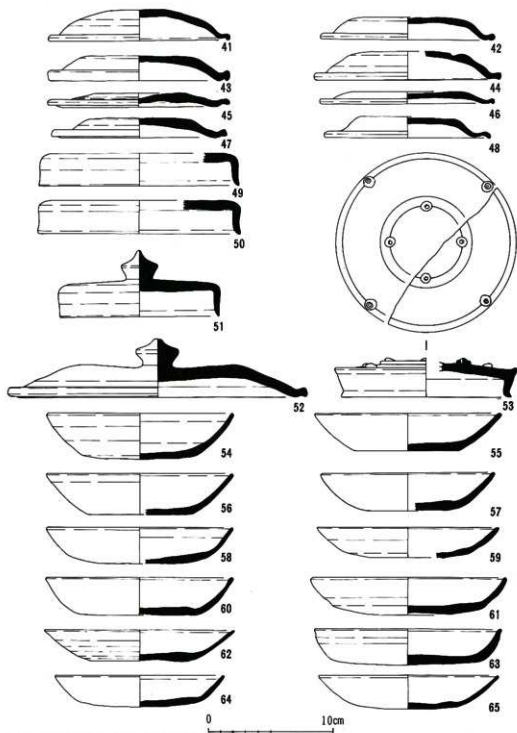
直口壺（213～214）（213）は口径14.1cmを測る。口頸部は肩部よりほぼ直線的に立ち上がり、口縁部において僅かに外反する。内外面ともに回転ナデ調整する。（214）は口径16.4cmを測る。肩部よりやや外上方へ直線的に伸びる頸部は、口縁部で強く外反する。口縁部から頸部にかけては内外面ともに回転ナデ調整するが、体部は外面にタタキ目、内面には同心円文の当て具痕を残している。

小型壺（219～220） 小型壺の破片であるが、（220）の胴部（219）の頸部が接着されるものかは不明である。

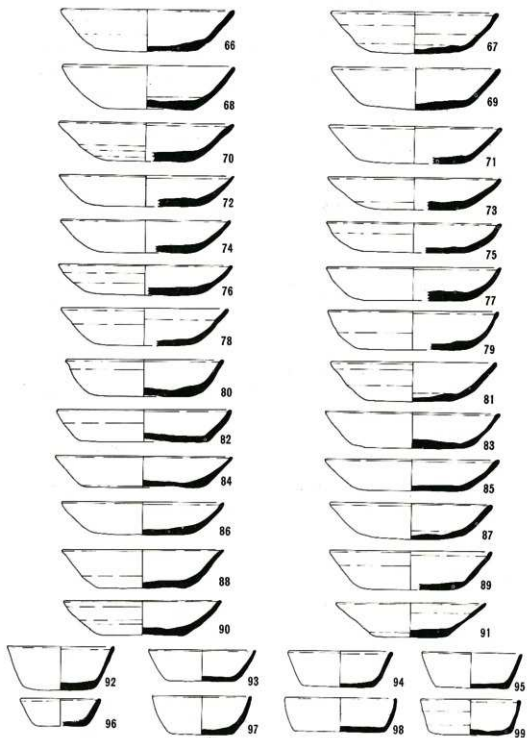
甕（215～216）（215）は奈良国立文化財研究所の分類による甕Cであり、口径は29.8cmを測る。肩部に最大径を持ち、「く」の字状に屈曲した頸部は短く伸びる。内外面ともに回転ナデ調整する。（216）は口径25cmを測り、内外面ともに回転ナデ調整する。



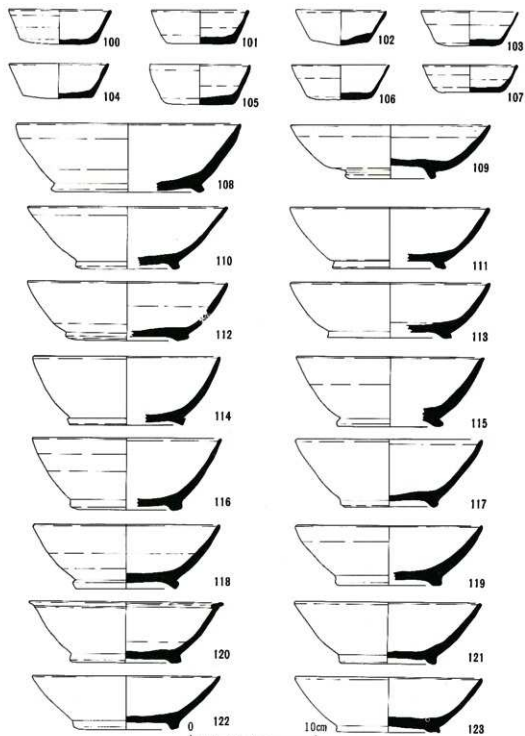
第11図 鉢伏2号窯址出土遺物実測図



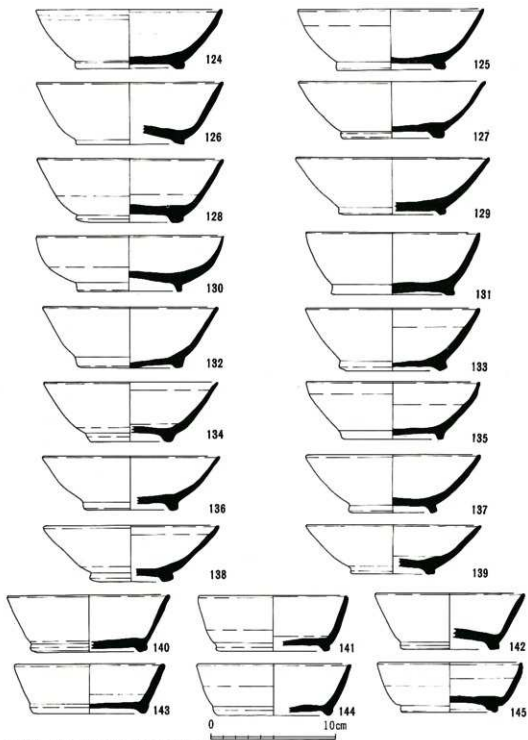
第12図 鉢伏2号窯址出土遺物実測図



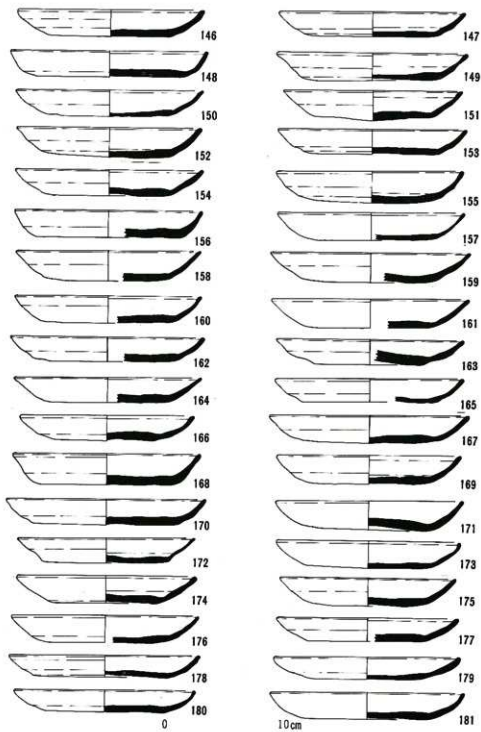
第13図 鉢伏2号窯址出土遺物実測図



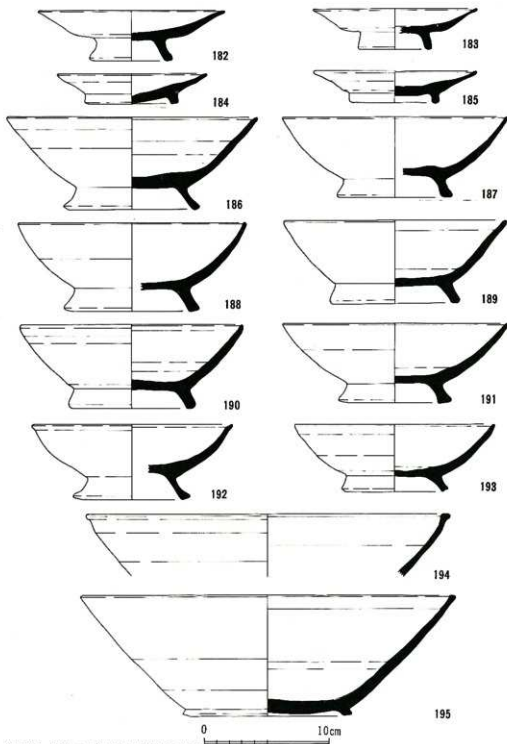
第14図 鉢伏2号窯址出土遺物実測図



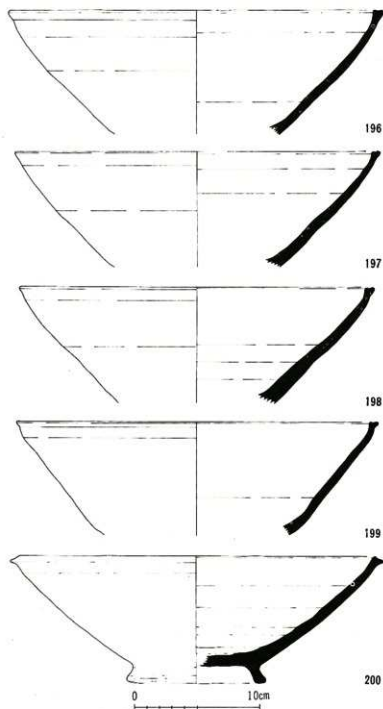
第15図 鉢伏2号窯址出土遺物実測図



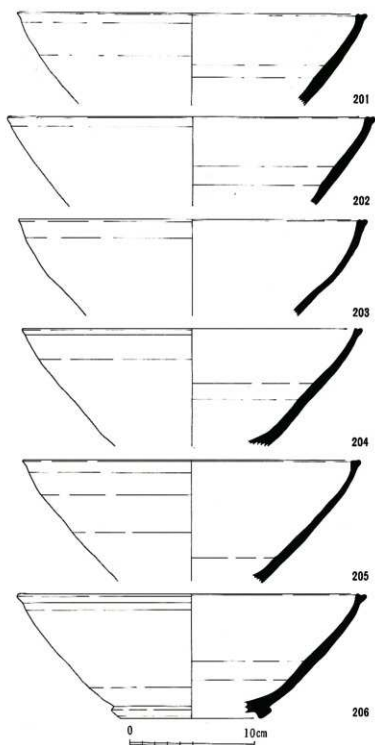
第16図 鉢伏2号窯址出土遺物実測図



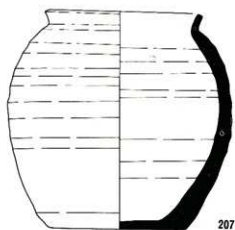
第17図 鉢伏2号窯址出土遺物実測図



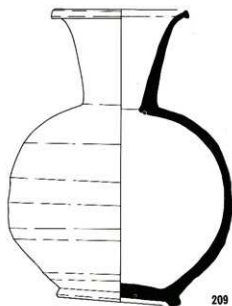
第18图 钵伏2号窑址出土遗物实测图



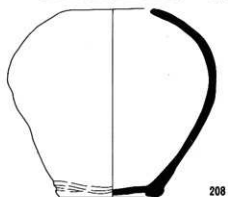
第19図 鉢伏2号窯址出土遺物実測図



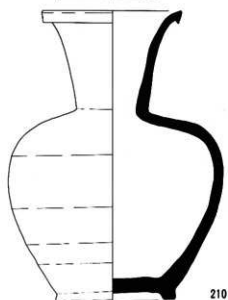
207



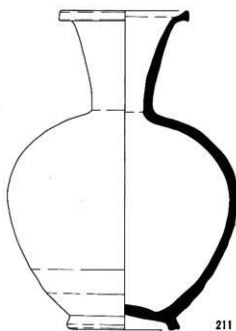
209



208



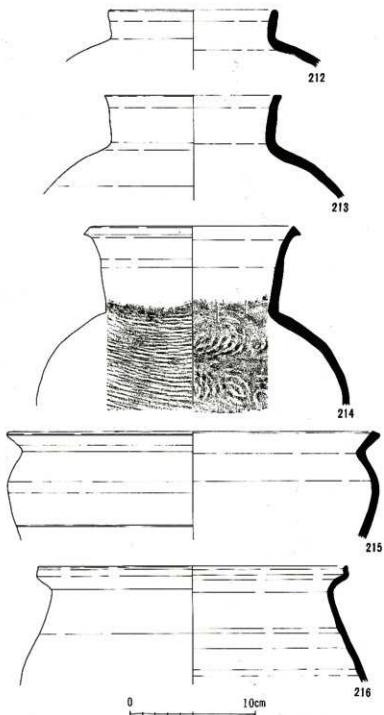
210



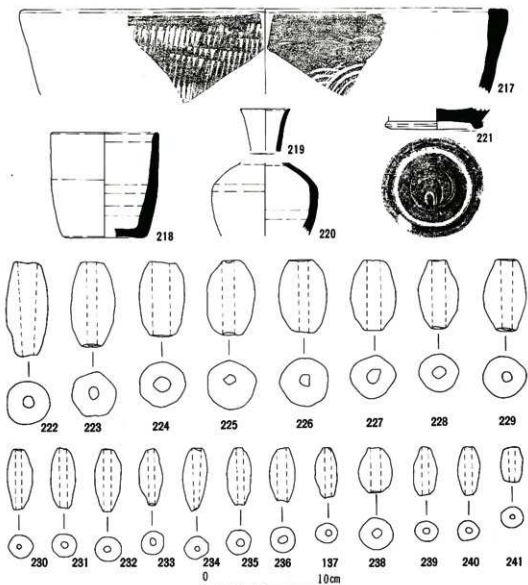
211

0 10cm

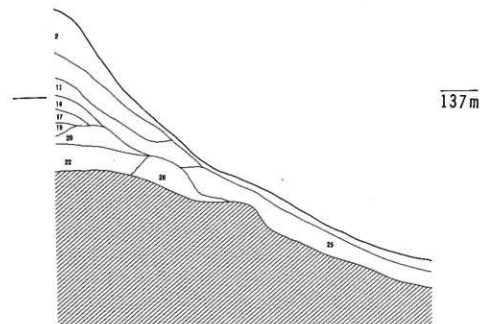
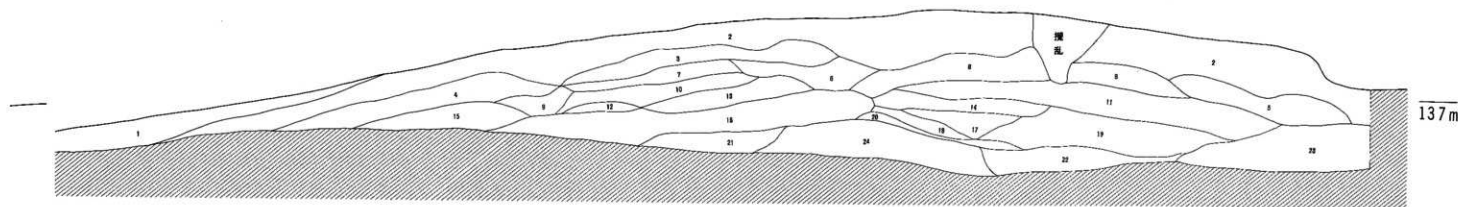
第20图 钵伏2号窯址出土遺物実測図



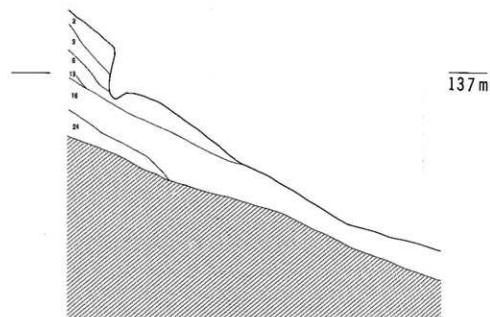
第21図 鉢伏2号窯址出土遺物実測図



第22図 鉢伏2号窯址出土遺物実測図



第23図 3号竈址灰層セクション図



- | | | |
|-----|-------|---------------------------|
| 1層 | 暗茶褐色土 | 遺物は少ない。 |
| 2層 | 黒褐色土 | 遺物は少ない。 |
| 3層 | 黒褐色土 | 遺物は少ない。 |
| 4層 | 黒褐色土 | 焼土を多く含むが遺物は少ない。 |
| 5層 | 黒褐色土 | 遺物は少ない。 |
| 6層 | 暗茶褐色土 | 遺物は少ない。 |
| 7層 | 暗茶褐色土 | 遺物は少ない。 |
| 8層 | 黒褐色土 | 遺物は少ない。 |
| 9層 | 茶褐色土 | |
| 10層 | 茶褐色土 | |
| 11層 | 黒褐色土 | 遺物は少ない。 |
| 12層 | 暗茶褐色土 | 遺物は少ない。 |
| 13層 | 黒褐色土 | 焼土を多く含む。 |
| 14層 | 黒褐色土 | 焼土を多く含むが遺物は少ない。 |
| 15層 | 黄褐色土 | 遺物は極めて少ない。 |
| 16層 | 黒褐色土 | 遺物を多く含む。 |
| 17層 | 黒褐色土 | 粘土粒を多く含むが遺物は少ない。 |
| 18層 | 白色粘土 | 磨盤を含む。遺物は少ない。 |
| 19層 | 白色粘土 | 磨盤を含む。遺物は少ない。 |
| 20層 | 黒褐色土 | 遺物を多く含む。 |
| 21層 | 黒褐色土 | 遺物を多く含む。 |
| 22層 | 黒褐色土 | 粘土粒及び焼土粒をやや多く含む。又遺物を多く含む。 |
| 23層 | 黒褐色土 | 遺物を多く含む。 |
| 24層 | 赤褐色土 | 磨盤及び遺物を多く含む。 |
| 25層 | 黒褐色土 | 遺物は少ない。 |
| 26層 | 黒褐色土 | 遺物は少ない。 |



2. 3号窯灰原

A. 層位 (第23図)

3号窯灰原の遺存状況は、2号窯灰原と同様に末端部を農道に削り取られていた以外は良好な状態であった。調査範囲内における最大幅はグリッド列によるC列で13mを測るが、C列の場合4列以西が調査区域外であるため、必ずしもこの数値が正確な最大幅を示しているものではない。

又、深さは6Cグリッドで最大1.72mを測る。灰層の堆積状況は極めて複雑な様相を呈しているものの、基本的には凸レンズ状の堆積を示している。第9図に示されているグリッド列C列における断面観察によれば、5、16、20、21、22、23、24の各層に遺物が特に多く包含されていた。これらのうち5、16、20、21、22、23層は黒褐色土であり、微妙な色調の相違および包含されている焼土、炭などの量比などの特徴により分層をおこなった。24層は赤褐色土であり、多量の焼土と焼成不良の製品で構成されており、グリッド列C列による観察では2.6m、厚さ40cmを測る。18、19層は白色粘土であり、少量の遺物および焼土、窯壁を含んでいた。本灰原は2号窯灰原と同様に凹状を呈した自然地形を利用して形成されていた。

B. 出土遺物 (第24～38図)

3号窯灰原における遺物の取り上げ方法、および本書における記載方法などは2号窯灰原におけるそれと同様である。

蓋 (242～315) 蓋のうち (242～312) は、坏Bおよび碗Bとセット関係を持つものである。これらの中で (242～255) は口径17.8～20cmを測り、器高1.3～3cmを測るが、これらは焼き歪みによる誤差を含むものであることから、製品としての器高は2cm前後を測るものと想定される。(256～312)は口径13～17cm、器高0.7～2.9cmを測る。先述したものと同様に焼き歪みが大きく、製品としての器高は1.5～2cmを測るものと考えられる。頂部は回転ヘラ切りののち不定方向のナデ調整を行い、体部内外面ともに回転ナデ調整を行うが、頂部の不定方向のナデ調整を省略するものも認められる。又、内面中央部には仕上げナデ調整している。頂部には調整終了後、製品を裏返して乾燥させた際に生じたと考えられるスノコ状の圧痕が多数の製品に認められる。(313)は、その形態より蓋と判断したがセット関係は不明である。口径18.4cm、器高3.6cmを測る。中央部は大きく凹状を呈し、内湾気味に下がる体部は強く外方へ屈曲し、平坦面を作ったのち口縁部は下方へ折れる。内面に設けられた1条の凸帯には4ヶ所の穿孔が認められる。頂部外面の凹状を呈した部分は不定方向のナデ調整、その内側の凸状を呈した部分には調整痕は認められず、他の部位は回転ナデ調整している。(314)は口径19.4cmを測るが、器高は銚に欠失しているため不明である。頂部と体部の境には1条の凸帯を有する。頂部には不定方向のナデ調整、体部内外面ともに回転ナデ調整を行ったのち、天井部内面中央を仕上げナデ調整する。(315)は小破片のため口径、器高ともに不明であるが、天井部最大径を復元すると13cmを測ることができる。本資料

から形態を復元すると、2号窯灰原より出土した(53)に類似するものと想定される。

坏A(316~385) (316~373)は口径12.3~15.8cm、器高2.4~3.9cmを測る。底部は回転ヘラ切りにより切り放されており、その後、不定方向の雑なナデ調整するものも認められる。体部は内外面ともに回転ナデ調整を行い、底部内面中央を仕上げナデ調整する。又、底部外面には調整終了後、製品を乾燥させた際に生じたと考えられるスノコ状の圧痕が多く認められる。(374~385)は口径6~9.6cm、器高2.2~3.3cmを測る。底部は回転ヘラ切りにより切り放されており、その後不定方向の雑なナデ調整するものも認められる。体部は内外面ともに回転ナデ調整を行い、底部内面中央を仕上げナデ調整するものを基本とするが、仕上げナデ調整を省略するものも認められる。

坏B(386~417) (386~410)は口径14~16.4cmを測り、器高3~6.2cmを測る。高台は断面形態が方形を呈するものと平行四辺形を呈するものの2種が認められ、それぞれ体部と底部の境付近に接着されている。又、高台底面全体を接地面とするものと、高台内面端部を接地面とするものに分類することができる。体部は口縁部まで内湾気味に伸びるものと、口縁部において外反するものに分けられる。(411~417)は口径11~13cm、器高3.8~5.6cmを測る。高台の形態は先述したものに準じているが、大きさは小型なものとなっている。体部の形態は若干内湾気味に立ち上がり口縁部へ至るものと、直線的に外上方へ伸び口縁部へ至るものに分類できる。調整技法は体部内外面ともに回転ナデ調整を行い、内面中央には仕上げナデ調整する。底部は回転ヘラ切りにより切り放されたのち、高台を接着し高台および底部外面を回転ナデ調整するものを基本とするが、底部外面の回転ナデ調整を省略し、高台部のみに回転ナデ調整するものも認められる。

皿A(418~453) 口径13~17cm、器高1.5~3.2cmを測る。底径の大きな底部より、短く内湾気味に立ち上がる体部を持つものを基本とするが、底部と体部の境が明瞭でなく弧状を呈するものも認められる。又、底部と体部の境には、しばしば凹状の強い押え込みの痕跡が認められる。調整技法は体部内外面ともに回転ナデ調整を行い、底部内面中央は仕上げナデ調整する。底部は回転ヘラ切りにより切り放されており、調整終了後、製品を乾燥させた際に生じたと考えられるスノコ状の圧痕が多く認められる。

皿B(454~461) 口径13~20cm、器高2.3~6cmを測る。出土点数が少ない割に形態差が大きい。体部内外面ともに回転ナデ調整を行い、底部内面中央を仕上げナデ調整する。底部外面は高台接着後、回転ナデ調整する。

碗B(462~470) 口径15~19cm、器高6.4~7.7cmを測る。高台は高く、端部を屈曲もしくは肥厚させたものを、底部と体部の境に接着している。体部は内湾気味に立ち上がり口縁部へ至る。体部内外面ともに回転ナデ調整を行い、底部内面中央を仕上げナデ調整する。又、底部外面は高台接着後、回転ナデ調整を行っており底部切り放し痕を消している。

大平鉢(471~481) 口径22~30cmを測り、器高8.2~11cmを測る。高台断面の形態には方形、長方形、平行四辺形が認められ、底部と体部の境に接着されている。体部は内湾気味に立ち上が

り口縁部へ至るが、端部においては肥厚する。端部上面は凹状を呈する。調整技法は、体部内外面ともに回転ナデ調整を行ったのち、底部内面中央を仕上げナデ調整する。底部外面は高台接着後に回転ナデ調整する。

高坏 (482) 脚筒部内外面ともに回転ナデ調整するが、坏部底部中央には仕上げナデ調整している。

長頸壺 (484~491) 口径7.6~14.6cmを測るが、器高は完形品が認められないため不明である。これらの中には肩部に耳を有する双耳壺も含まれている。調整技法は頸部、体部ともに回転ナデ調整を主としているが、耳の接合部は縦方向のナデ調整する。底部には断面方形の高台を有するものも認められる。

小型壺 (505、507~511) 口径2.9~3.8cm、器高9.2cmを測る。底部切り放し技法にはバラエティーがあり、回転ヘラ切り (507)、静止糸切り (508~509)、回転糸切り (510~511) が認められる。このうち (511) は回転糸切りののち外周部をヘラ削りを行い、その後、断面方形を呈する高台を接着している。

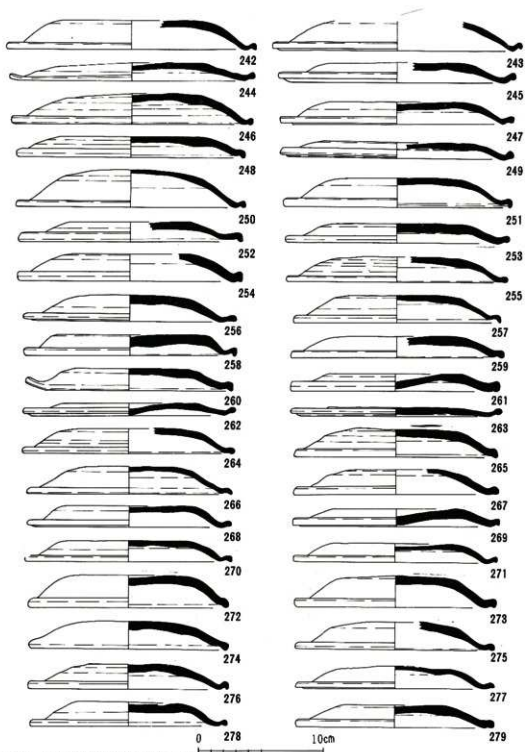
短頸壺 (492~494、496~497) 口径12.4~23cmを測る。蓋を有すると考えられるもの (492~493) と、それ以外のものに分類できる。内外面ともに回転ナデ調整する。

直口壺 (495) 口径18.9cmを測る。頸部は肩部よりやや外湾気味に立ち上がり、口縁部において外方へ屈曲する。口縁端部上面は凹状を呈する。口縁部、頸部ともに回転ナデ調整を行い、体部内面には同心円文様の当て具痕、体部外面にはタタキ目痕を各々残している。

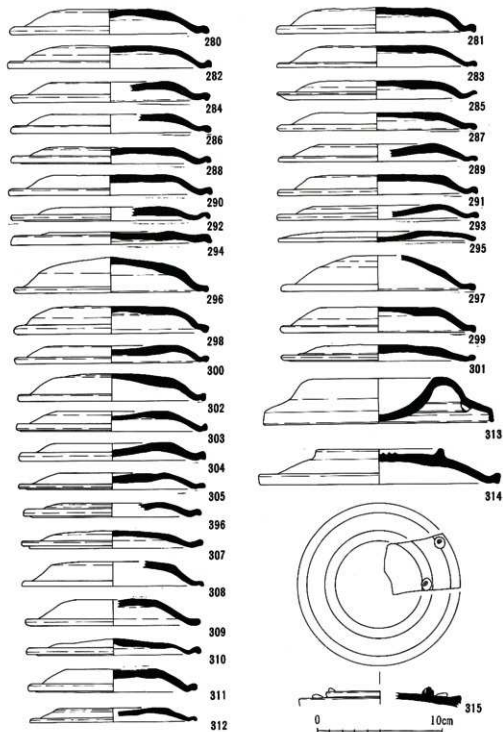
甕 (498~503) 口径は19.4~33.2cmを測る。各種形態別に細分が可能である。口縁部および頸部は回転ナデ調整するが、体部の調整技法はバラエティーに富んでいる。即ち、内外面ともに回転ナデ調整するもの (499~501、503)、内面を回転ナデ調整し当て具痕を消すが外面にはタタキ目痕を残すもの (498)、内面を回転ナデ調整し、外面は弱いタタキ目調整するもの (502) である。

小型甕 (483) 口径12.6cm、器高10.9cmを測る。底径の大きな底部より弓張り状に内湾しながら伸びた体部は、頸部で外上方へ屈曲したのち口縁部で更に上方へ短く屈曲する。口縁部、頸部、体部ともに回転ナデ調整する。底部切り放しは静止糸切りである。

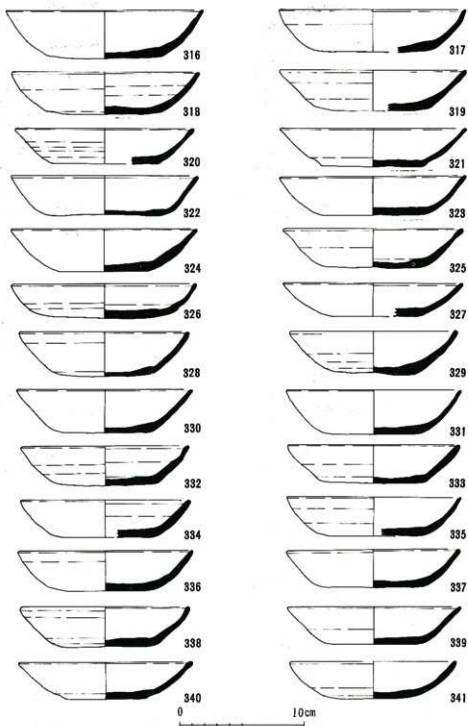
平瓶 (504) 頸部以上を欠失しているため器高などは不明である。本来は体部上面に把手を有していたものと考えられ、その剝離痕が認められる。又、底部には断面方形を呈する高台を接着している。調整技法は、体部上面を回転ヘラ削りするほかは回転ナデ調整する。底部中央にはスノコ状の圧痕が認められる。



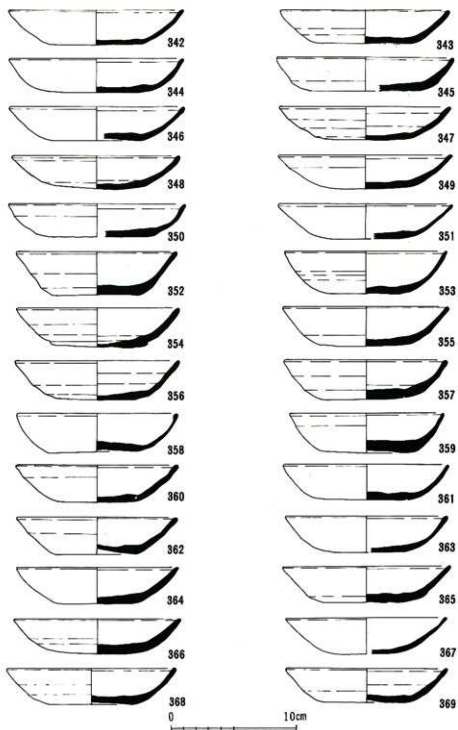
第24图 钵伏3号墓址出土遗物实测图



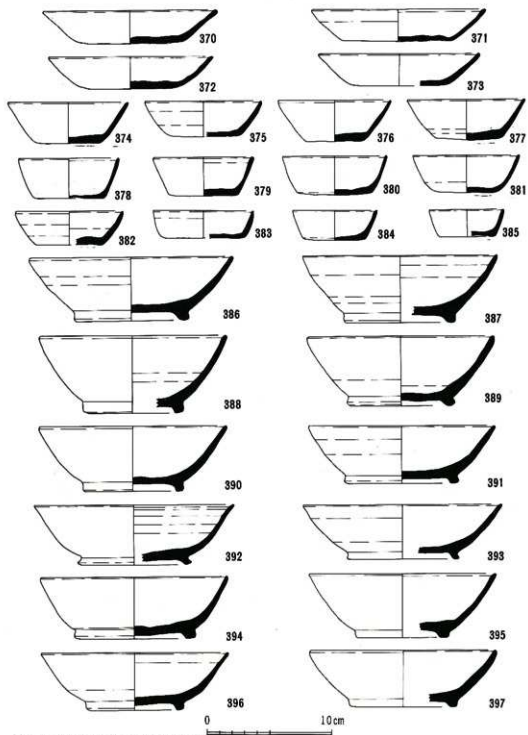
第25図 鉢伏3号窯址出土遺物実測図



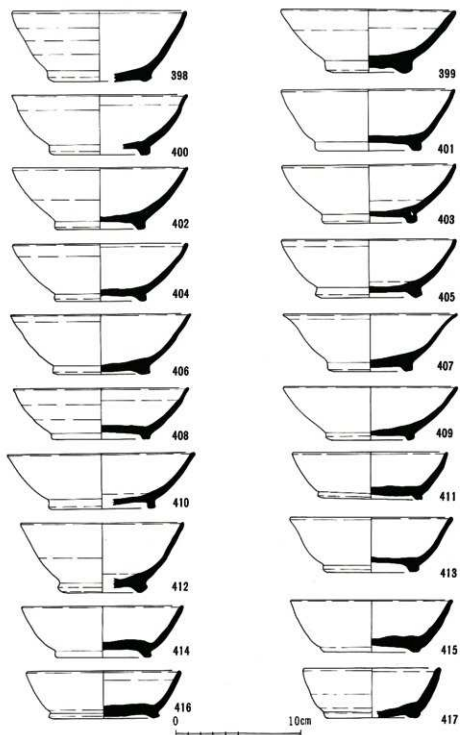
第26图 钵伏3号窯址出土遺物実測図



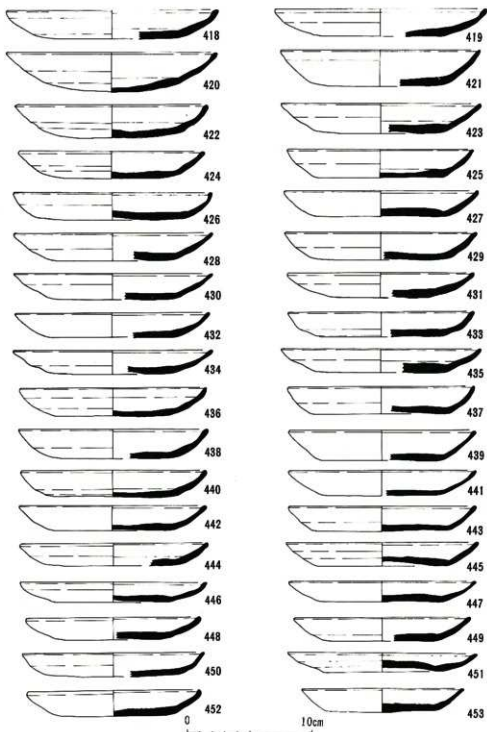
第27図 鉢伏3号窯址出土遺物実測図



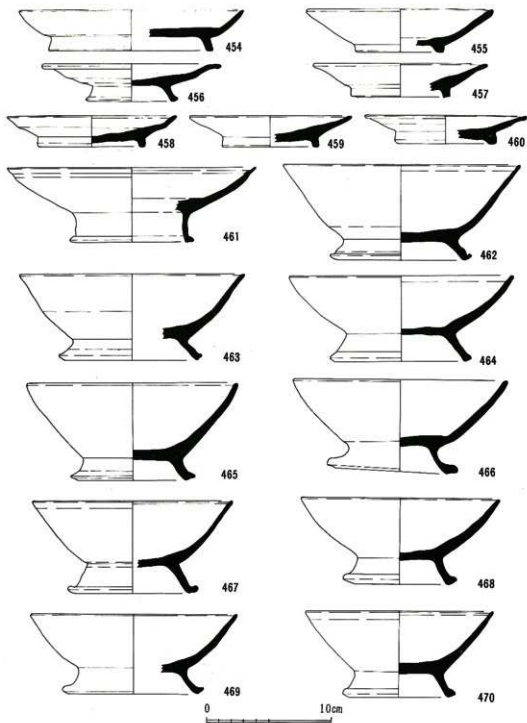
第28图 钵伏3号墓址出土文物实测图



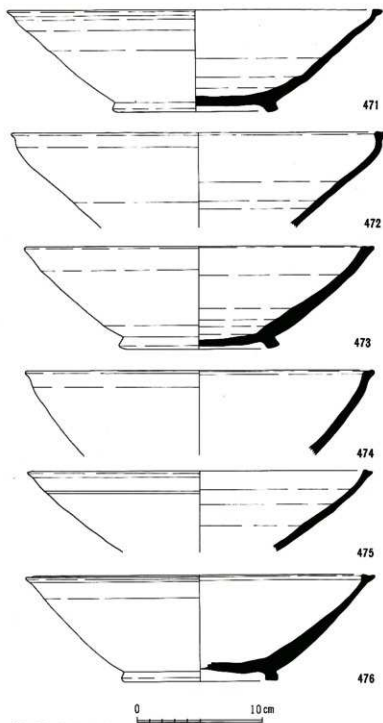
第29図 鉢伏3号窯址出土遺物実測図



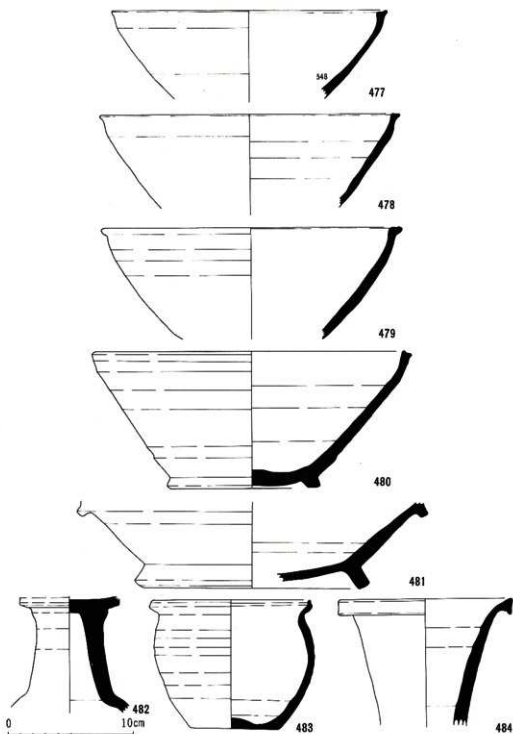
第30图 钵伏3号窑址出土遗物实测图



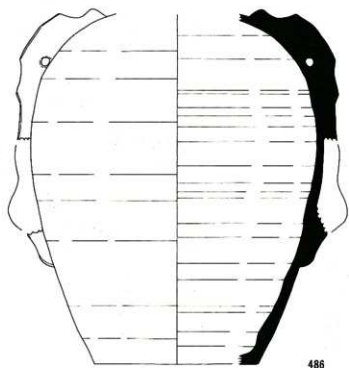
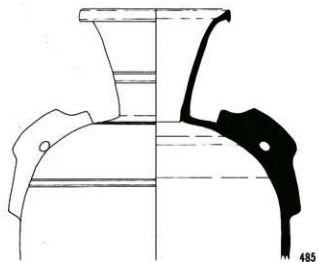
第31図 鉢伏3号窯址出土遺物実測図



第32图 钵伏3号窯址出土遺物実測図

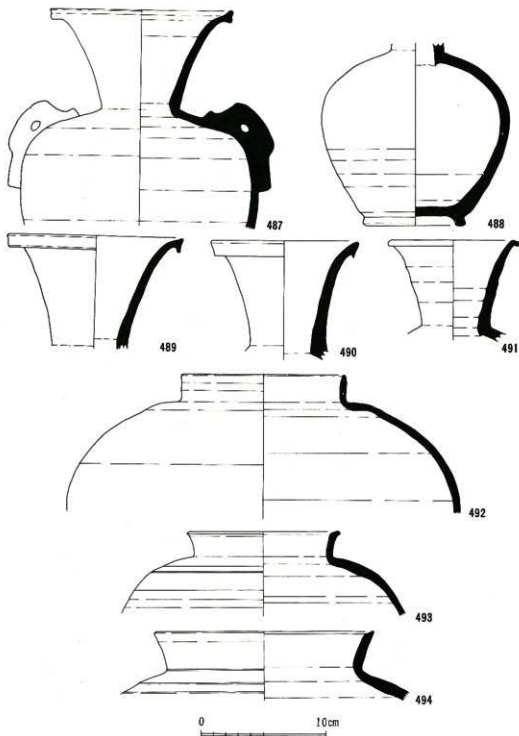


第33図 鉢伏3号窯址出土遺物実測図

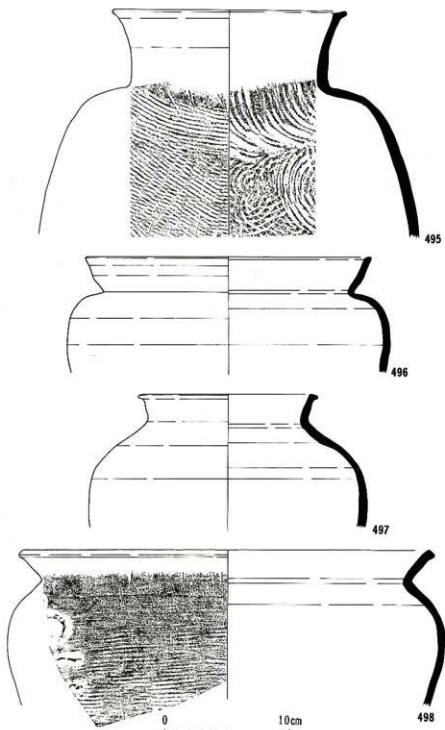


0 10cm

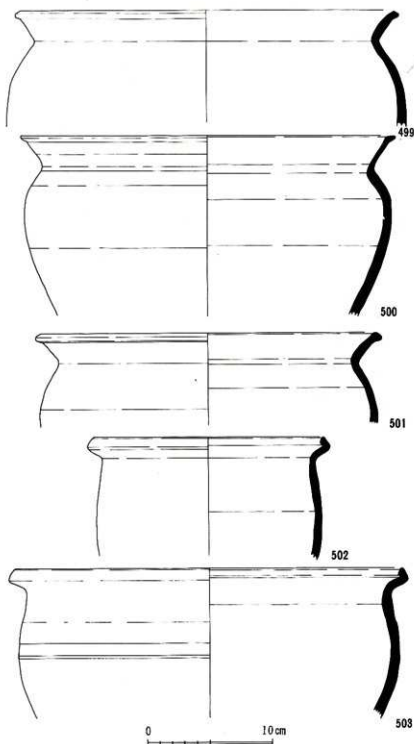
第34图 钵伏3号窑址出土遗物实测图



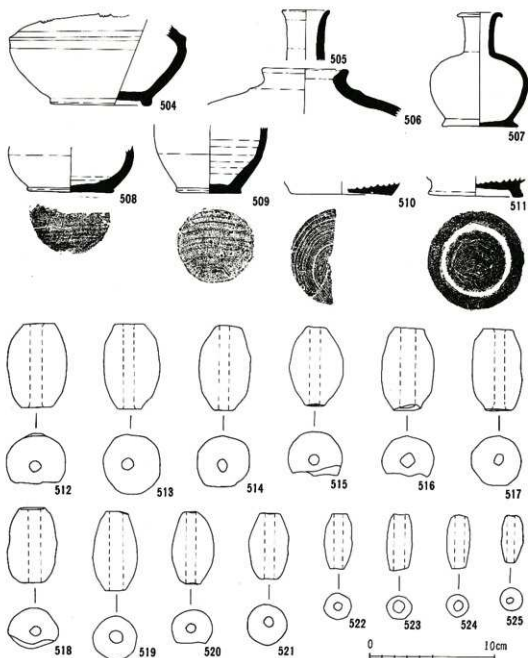
第35図 鉢伏3号墓址出土遺物実測図



第36图 钵伏3号窑址出土遗物实测图



第37図 鉢伏3号窯址出土遺物実測図



第38图 钵伏3号窖址出土遗物实测图

第Ⅳ章 総 括

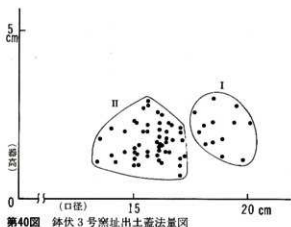
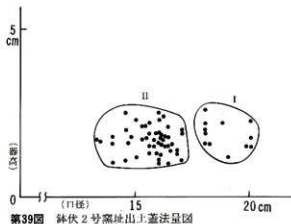
第Ⅲ章においては、鉢伏2、3号窯址出土資料の概略を述べるとともに出土資料の実測図を提示してきた。本章においては、これらを基に本窯址における須恵器生産の様相についての若干の見通しについて述べることにする。しかし、先述したごとく出土資料の約半数が未整理のため、今後の整理進行に伴い基礎データの修正も考えられることから、最終的な見解は整理終了後に予定している最終報告に示すことにする。

1. 法量分化と規格性

2号窯址における蓋の法量は第39図のとおりである。Ⅰ類：口径18～22cm、Ⅱ類：口径13.3～17cmが認められる。計測を行った総個体数から各々の占める割合を示すと、Ⅰ類：17%、Ⅱ類：83%でありⅡ類が主体をなす。Ⅰ類は坏BⅠ類、碗BⅠ類、Ⅱ類は坏BⅡ類、碗BⅡ類と各々セット関係を持つものと考えられる。

3号窯址における蓋の法量は第40図のとおりである。Ⅰ類：口径17.8～20cm、Ⅱ類：口径13～17cmに分化している。計測を行った総個体数から各々の占める割合を算出するとⅠ類：16%、Ⅱ類：84%であり、Ⅱ類が主体をなす。この様相は2号窯址と同一のものである。Ⅰ類は碗BⅠ類と、Ⅱ類は坏BⅡ類、碗BⅡ類と各々セット関係を持つものと考えられる。2、3号窯址ともに主体となるⅡ類は、その割合においてⅠ類を圧倒しており、この傾向は先行して操業していたと考えられる鉢伏1号窯址（小曾原31号窯址）においても想定されるものである。

2号窯址における坏Aの法量は第41図のとおりである。法量は1種のみであり、口径12～15.7cmの間に分布するが、計測を行った総個体数から1cmごとの各々が占める割合を示すと、12cm台：4%、13cm台：41%、14cm台：39%、15cm台：16%となり、13～14cm台が坏Aの中心となり80

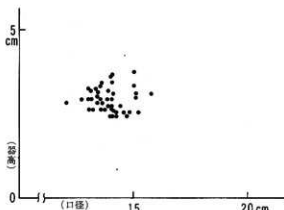


%を占めている。

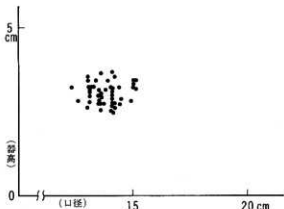
3号窯址における環Aの法量は第42図のとおりであり、2号窯址と同様に法量分化は認められず、法量は1種のみである。口径12.3～15.8cmの間に分布するが計測を行った総個体数から1cmごとの各々が占める割合を算出すると、12cm台：3%、13cm台：45%、14cm台：43%、15cm台：9%となり、13～14cm台が環Aの中心であり88%を占めている。2、3号窯址出土の環Aを先述したグラフ上に重ね合わせると径高指数17～26の間に分布しており、ほぼ同じ重なりを見せている。径高指数の中心は21前後であるが、指数の小さい17付近では後述するⅢAと重なっている。

2号窯址における環Bの法量は第43図のとおりであり、Ⅰ類：口径18cm、Ⅱ類：口径14～16cm、Ⅲ類：口径11.6～12cmの3種に法量分化している。計測を行った総個体数より各々の占める割合を算出すると、Ⅰ類：3%、Ⅱ類：82%、Ⅲ類：15%となる。径高指数28～39の間に分布しており、その中心は33前後である。

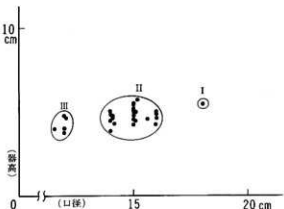
3号窯址における環Bの法量は第44図のとおりである。Ⅱ類：口径14～16.4cm、Ⅲ類：口径11～13cmの2種に法量分化しているが、2号窯址で小数ながらも確実に認められたⅠ類は、3号窯址においては認められず、法量分化の減少傾向が確認できる。計測を行った総個体数より各々の占める割合を算出すると、Ⅱ類：85%、Ⅲ類：15%である。分布状況は径高指数22～44の間に分布しており、その中



第41図 鉢伏2号窯址出土環A法量図



第42図 鉢伏3号窯址出土環A法量図



第43図 鉢伏2号窯址出土環B法量図

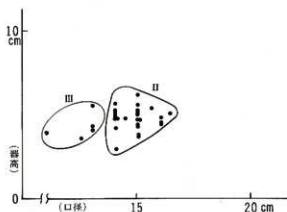
心は2号窯址と同じく33前後である。

2号窯址における皿Aの法量は第45図に示すとおりである。口径14～16cmを測るもの1種のみであり、法量分化は認められない。計測を行った総個体数から1cmごとの各々の占める割合を示すと、14cm台：32%、15cm台：57%、16cm台：11%となり、14～15cm台が皿Aの中心であり89%を占めている。径高指数の分布状況では11～18の間に分布しており、その中心は14前後である。

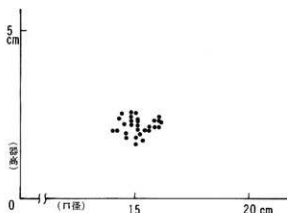
3号窯址における皿Aの法量は第46図に示すとおりである。口径13.3～17cmを測るもの1種のみであり、法量分化は認められない。計測を行った総個体数から1cmごとの各々が占める割合を示すと、13cm台：3%、14cm台：19%、15cm台：52%、16cm台：21%、17cm台：5%となり、15cm台が皿Aの中心であり全体の52%を占めている。径高指数の分布状況では10～19の間に分布しており、その中心は15前後である。2、3号窯址出土の皿Aを先述したグラフ上に重ね合わせるとほぼ同じ重なりを見せるものの、3号窯址の方が分布に若干の広がりを見せている。又、径高指数17～19付近では皿Aの分布と重複する様相を見せている。

2号窯址における皿Bの法量は第47図のとおりであるが、出土点数も少なく統計処理に耐えうる内容を持ってはいない。

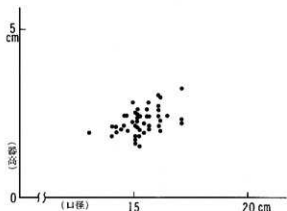
口径は12～15cmの間に、まとまりを持つことはなく分布しており、径高指数は33を測るものが1点のみ存在するほかは19～27の間に分布している。



第44図 鉢伏3号窯址出土皿B法量図

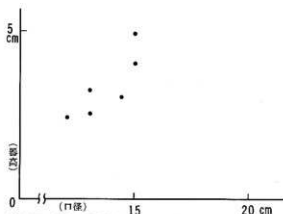


第45図 鉢伏2号窯址出土皿A法量図



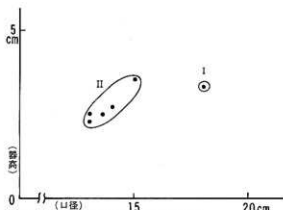
第46図 鉢伏3号窯址出土皿A法量図

3号窯址における皿Bの法量は第48図のとおりである。2号窯址と同様に出土点数は少ないが、I類：口径18cm、II類：口径13～15cmの2種に分類できる。計測を行った総個体数から各々の占める割合を示すと、I類：17%、II類：83%となり、径高指数17～24の間に分布している。2、3号窯址出土の皿Bを同一のグラフ上に重ね合わせると、2号窯址では若干散満気味であった法量分布が、3号窯址では比較的まとまりを持っていることが判る。



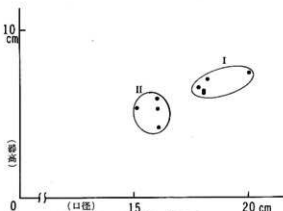
第47図 鉢伏2号窯址出土皿B法量図

2号窯址における碗Bの法量は第49図のとおりであり、I類：口径17.8～20cm、II類：口径15.1～16cmの2種に法量分化している。計測を行った総個体数より各々の占める割合を算出すると、I類：56%、II類：44%となる。径高指数27～39の間に分布するが、その中心は37前後である。



第48図 鉢伏3号窯址出土皿B法量図

3号窯址における碗Bの法量は第50図のとおりであり、I類：口径17.2～19cm、II類：口径15～16.6cmの2種に分類できる。計測を行った総個体数より各々の占める割合を算出すると、I類：50%、II類：50%となる。径高指数は39～47の間に分布しており、2号窯址が27～39であったのに対し径高指数が大きくなっている。又、その中心は42前後である。



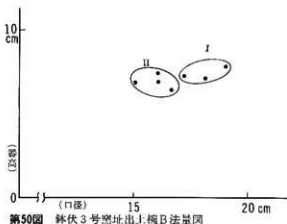
第49図 鉢伏2号窯址出土碗B法量図

2号窯址における陶鉢の最大長と最大径の相関グラフを示せば第51図のようになる。これらはI類：最大長4.4×最大径2cm付近に集まるもの、II類：最大長6×最大径3.8cm付近に集まるもの、の2種

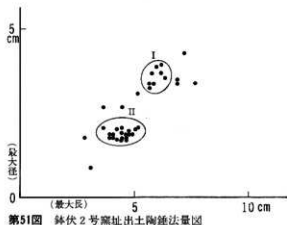
に大きく分類することができる。しかし若干の例外も存在し、全てがこれらに分類できるものではない。又、各々のグループを指数によって示せばⅠ類：60前後、Ⅱ類：45前後である。

3号窯址における陶鉢の最大長と最大径の相関グラフを示せば第52図のようになる。2号窯址出土品と比較すると若干散漫的な傾向を見せるが、これらもⅠ類：最大長6.5×最大径4.3cm付近に集まるもの、Ⅱ類：最大長4.5×最大径2cm付近に集まるもの、の2種に大きく分類することができる。しかし、2号窯址と同様に全てがこれらに分類できるものではない。又、各々のグループを指数によって示せばⅠ類：65前後、Ⅱ類：45前後でありⅠ類の指数が2号窯址と比べ大きくなっている。

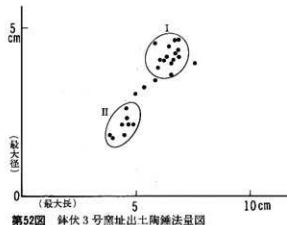
以上、鉢伏2、3号窯址出土資料における法量分化について述べてきたのであるが、これらの中でもっとも注目されるのは環Bの様相である。即ち、2号窯址においてはⅠ、Ⅱ、Ⅲ類と3種に分化していたのであるが、3号窯址では一番大形であったⅠ類が確認されておらず、法量分化が2種へと減少している。このような動きは平城宮Ⅱ併行期にもっとも発達した法量分化が、以後、漸次整理縮小されて行くという一連の動きの中で説明されるものであり、2、3号窯址の前後関係を示す一端であると考えられる。又、蓋と環Bのセット関係を検討した場合、必ずしも両者の法量分化は一致しない。環BⅢ類と明確なセット関係をもつ蓋を



第50図 鉢伏3号窯址出土陶鉢法量図



第51図 鉢伏2号窯址出土陶鉢法量図

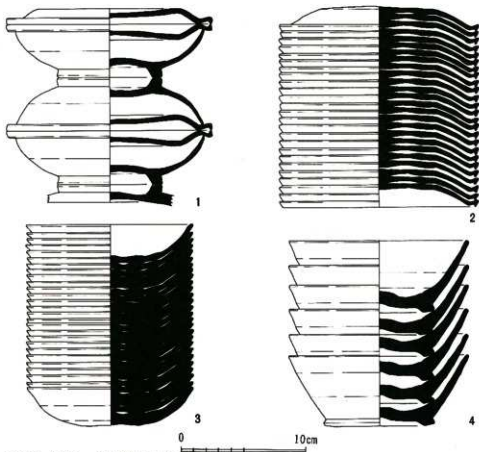


第52図 鉢伏3号窯址出土陶鉢法量図

独立したグループとして捉えることができず、坏BⅡ類とセット関係を持つと想定される蓋Ⅱ類の中でも小形の製品が、法量分化として形を取らずに存在し坏BⅢ類に対応する蓋として機能していたものと考えられる。

2. 重ね焼き

今回の調査においては直接、重ね焼きの状態を示す資料として2枚以上の焙着資料を多数検出することができた。第53図に示すのは、現在までに得られている資料から重ね焼き状況を模式図として示したものであり、これらは2類に分類できる。Ⅰ類(1)は正位の椀に逆位の蓋を乗せ、その上に正位の蓋、更に逆位の椀を乗せるものである。Ⅱ類(2～4)は蓋、坏ともに同一の型式のみを正位の状態で重ねるものであり、Ⅰ類と比較して圧倒的多数を一度に積み上げることができる。又、竈詰めに際してもっとも安定した状態である。現在までに確認し得た資料のうち大部分のものはⅡ類に分類されるものであり、Ⅰ類に属するものは2号竈址灰原より1例確認されているのみである。ここで重ね焼きの変化について検討を加えると、Ⅰ類は古墳時代以来、数々のバリエーションが認められるものの、蓋と坏、椀をセットで焼成するという点において主体とな



第53図 鉢伏2、3号竈址重ね焼き模式図

り続けていた重ね焼き方法であった。これに対してⅡ類は、Ⅰ類と同様に古墳時代以来認められる方法ではあるが決して主体となり得るものではなかった。このような状況であったものが、本窯址においては逆転しており、2号窯址においてはⅡ類が主体的でありⅠ類が客体的となっている。又、3号窯址においてはⅡ類のみでⅠ類は認められない。かかる状況は生産者側の生産体制に起因するものと考えられる。窯詰めの際にⅡ類の重ね焼き方法を採用したばあい、先述したごとくⅠ類と比較して圧倒的多数を一度に窯詰めすることができ、多量生産指向と言うことができる。しかし、その反面Ⅰ類と比べ製品同士の接着面も大きく、熔着し易いという欠点を持っている。事実、熔着資料のうち最大40枚を数えるものがあり、30枚前後を有するものは多数認められる。このような多少多くの失敗品を容認し多量生産を指向する背景には、法量分化の整理縮小、調整の粗雑化などの一連の動向と連動するものがあり、須恵器生産体制変質の一側面と考えられる。

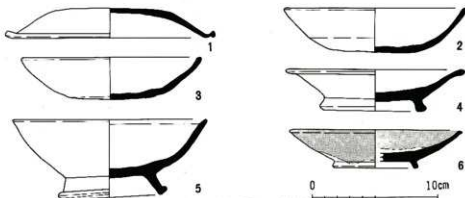
3. 編年的位置づけ

本稿においては鉢伏2、3号窯址の編年的位置づけについて述べることにするが、本論へ移る前に多少の混乱を招いていると考えられる窯址名、及び窯式名について確認を行うこととする。

南越古窯址群における編年案は田中照久氏により『福井県窯業誌』⁽¹⁾『宮崎村誌』⁽²⁾『福井県史』⁽³⁾『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』⁽⁴⁾に述べられているが、基本的な内容についての変更は認められない。ただ、窯址名については『福井県窯業誌』⁽⁵⁾において小曽原古窯址群としての通し番号による窯址名と、より小さな単位を基準とした窯址名を旧名として併記しているのに対して、それ以後に発表された『宮崎村誌』⁽⁶⁾『福井県史』⁽⁷⁾『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』⁽⁸⁾では、旧窯址名を用いてはいない。しかし、筆者は遺跡名を小曽原という広い地域を一括して扱うことより、より小さな字名等を用いる方が実状に即していると考えているため、本書では旧窯址名を用いることとし、小曽原による通し番号は()内に併記して以下に論を進めることとする。

筆者は、隣接する鉢伏1号窯址(小曽原31号窯址)について若干の検討を別稿において加えたことがある。⁽⁹⁾即ち、鉢伏1号窯式(小曽原31号窯式)併行の須恵器が福井市に所在する和田防町遺跡S D-012Ⅲ層において、黒笹90号窯式2型式と考えられる灰釉陶器と相伴していることから、鉢伏1号窯式(小曽原31号窯式)と黒笹90号窯式が併行関係にあるものと考えたのである。このことを踏まえた上で鉢伏3号窯址(小曽原33号窯址)について検討を加えると、本時期の流れが明確なものとなってくる。

第54図は、武生市に所在する村国遺跡第Ⅳ次調査Ⅰ区A南地区第2層出土遺物の一部である。⁰⁰これらは遺構に伴うものではないが、まとめて廃棄された状態で出土していることから、一定の時間的まとまりを持つ一群として扱うことができるものと考えている。(1～5)は須恵器であり(6)は灰釉陶器である。須恵器を胎土を基準に分類すると、A類(2～4)：粒径1～2mmの小



第54図 村国遺跡第IV次調査I区A南地区第2層出土遺物実測図

石を少量含み、砂粒を多量に含むもの。B類（1、5）：粒径1mm前後の小石を極少量含むが、胎土が緻密であるもの。に分類することができる。又、焼成はA類が不良で軟質であるのに対して、B類は良好で硬質である。蓋（1）は口径16.8cm、器高2.4cmを測る。天井部には、スノコ状の圧痕を残し無紐である。坏A（2～3）は口径14.4～14.6cm、器高3.4～3.5cmを測る。底部は回転ヘラ切りにより切り放されており、スノコ状の圧痕を有するものも認められる。皿B（4）は口径14.4cm、器高3.4cmを測る。柄B（5）は口径15.6cm、器高6.2cmを測る。高台は高く、端部を外上方へ屈曲させている。これらの特徴から本土器群は鉢伏3号窯址（小曾原33号窯址）と併行するものと考えられる。（6）の灰釉陶器は口径13.8cm、器高3.1cmを測り、胎土は灰白色を呈し焼成は良好である。内面の底部と体部の境には直接重ね焼きを行った高台跡が認められ、釉薬は液け掛けにより施されている。本品は美濃における灰釉陶器編年の大原2号窯式に比定されるものと考えられ、先に行った検討結果から鉢伏3号窯址（小曾原33号窯址）は大原2号窯式に併行するものと考えられる。鉢伏3号窯址（小曾原33号窯址）を南越古窯址群における編年案に位置づけると、神明ヶ谷1号窯式（小曾原1号窯式）に属するものと考えられる。神明ヶ谷1号窯式（小曾原1号窯式）は、昭和40年に名古屋大学考古学研究室を中心として発掘調査が行われているのであるが報告書が未刊行であり、先述した田中氏による論巧に小数の実測図が提示されている以外は詳細は不明である。⁽¹²⁾ このため、本稿で言うところの神明ヶ谷1号窯式（小曾原1号窯式）の具体的内容については、今回報告した鉢伏3号窯址（小曾原33号窯址）をもってその代表としておきたい。

以上、須恵器と灰釉陶器との併行関係について述べてきたのであるが、次にこれらの実年代について若干の検討を加えることとする。

石川県松任市に所在する横江庄遺跡の調査報告書において「奈良平安時代の上器編年」⁽¹³⁾をまとめられた吉岡康暢氏は、石川県のみではなく福井県、富山県の様相についても述べられている。その中で神明ヶ谷1号窯址（小曾原1号窯址）をV₁期に位置づけられており、10世紀第3四半期という実年代を与えている。その根拠として福井県鯖江市に所在する下河端遺跡出土の「庚戌」

の墨書銘を有する須恵器を天暦4年(950)に比定され、同段階と考えられる戸津9号窯址の熱残留磁気測定値が960年頃の可能性が高いことから、これが保証されるとしている。

石川県羽咋市に所在する寺家遺跡の調査報告書において小嶋芳孝氏は、7世紀～14世紀前半にかけての土器群を17小期に細分されている。このうちⅣ¹⁰期が神明ヶ谷1号窯式(小曾原1号窯式)を含む段階であり、先述した下河端遺跡出土の墨書土器について他の寺家遺跡出土土器群の検討結果から、先の吉岡編年より60年遡らせて寛平2年(890)に比定している。

出越茂和氏は、石川県金沢市に所在する末古窯址群の調査報告書において、「金沢における八～十世紀の食膳土器」と題する論考をまとめており、この中で8～10世紀の土器群を10小期に細分されている。先述した下河端遺跡出土の墨書土器をⅣ¹⁰期に位置づけ実年代については、小嶋氏と同様に寛平2年(890)に比定している。

このように現在では、神明ヶ谷1号窯式(小曾原1号窯式)の実年代の定点の一つを寛平2年(890)と考える動きが主体的となりつつあるが、それらが灰釉陶器などからの共伴関係から導き出されたものではなく、各遺跡ごとに得られた土器編年における前後の土器群の年代観により影響を受けたものであることからやや不安定な要素となっている。

以上のような状況に対して、先述した和田防町遺跡及び村国遺跡出土例は須恵器の実年代比定に貴重な資料を呈示したものと言える。灰釉陶器の年代観については前川要氏による一連の優れた業績が有り、これらに従えば黒笹90号窯式は9世紀第3～4四半期に、大原2号窯式は10世紀第1～2四半期に位置づけることができる。このことにより先に紹介した共伴例から、鉢伏1号窯式(小曾原31号窯式)及び神明ヶ谷1号窯式(小曾原1号窯式)に各々9世紀後半、10世紀前半という略年代を与えることができるのであるが、須恵器と灰釉陶器の各窯式における年代幅が同一とは考えられないことから、ここに若干の問題が生じる。即ち、灰釉陶器である黒笹90号窯式、大原2号窯式には一窯式約50年の年代幅が与えられているのであるが、それに対して本地域の須恵器窯式については一窯式20～30年で理解されるのである。よって、仮に神明ヶ谷1号窯式(小曾原1号窯式)の実年代の定点の一つを吉岡氏と同様に天暦4年(950)と考えた場合、先行する鉢伏1号窯式(小曾原31号窯式)と共伴する灰釉陶器は大原2号窯式もしくは黒笹90号窯式でも終末の型式でなければならないのである。しかし、先述した和田防町遺跡出土資料による限りでは鉢伏1号窯式(小曾原31号窯式)と共伴するものは黒笹90号窯式の終末型式とは考えられず、それより先行する型式と考えられることから天暦4年(950)を神明ヶ谷1号窯式(小曾原1号窯式)の実年代の定点の一つと考えるためには若干の無理が生じることとなる。これらのことから下河端遺跡出土の墨書土器、及び神明ヶ谷1号窯式(小曾原1号窯式)の年代の一定点は小嶋、出越氏が想定されたとく寛平2年(890)と考えた方が妥当なものと考えられる。又、前後の窯式関係から想定すると寛平2年(890)は神明ヶ谷1号窯式(小曾原1号窯式)の中でも極めて早い年代を示すものと考えられ、神明ヶ谷1号窯式(小曾原1号窯式)は黒笹90号窯式終末～大原2号窯式の前半位までと併行関係を持つものと想定される。

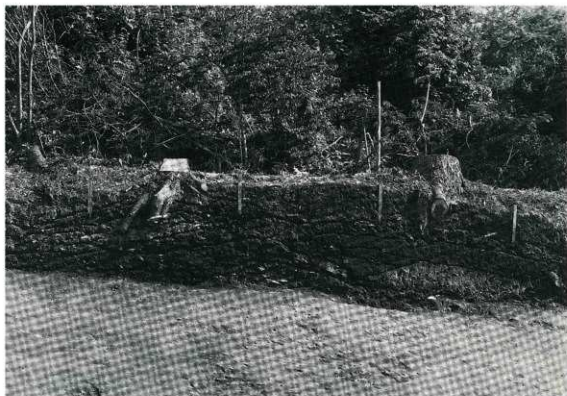
- (1) 田中照久 「越前・若狭の須恵器窯」『福井県窯業誌』 福井県窯業誌刊行会 1983年
- (2) 田中照久 「宮崎村の須恵器窯址」『宮崎村誌』 上巻 宮崎村 1984年
- (3) 田中照久 「南越古窯址群」『福井県史』 資料編13 福井県 1986年
- (4) 田中照久 「丹生古窯跡群」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』 資料編
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988年
- (5) 注(1)に同じ。
- (6) 注(2)に同じ。
- (7) 注(3)に同じ。
- (8) 注(4)に同じ。
- (9) 水村伸行 「鉢伏1号窯址とその年代」『福井考古学会々報』 第28号 福井考古学会
1989年
- (10) 出土資料の実測に際しては武生市教育委員会、林憲司氏の御配慮を得た。
- (11) 田口昭二 「美濃焼」考古学ライブラリー17 ニュー・サイエンス社 1983年
- (12) 注(1)～(4)に同じ。
- (13) 吉岡康暢 「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』 松任市教育委員会 石川
考古学研究会 1983年
- (14) 小嶋芳孝 「土器にみる画期と年代観」『寺家遺跡発掘調査報告』II 石川県立埋蔵文化財
センター 1988年
- (15) 出越茂和 「金沢における八～十世紀の食膳土器」『金沢市末窯』 金沢市教育委員会
1989年
- (16) 前川要 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀
要』III 瀬戸市歴史民俗資料館 1984年
前川要 「平安時代における東海系緑釉陶器の使用形態について」『中近世土器の基礎研
究』 日本中世土器研究会 1987年



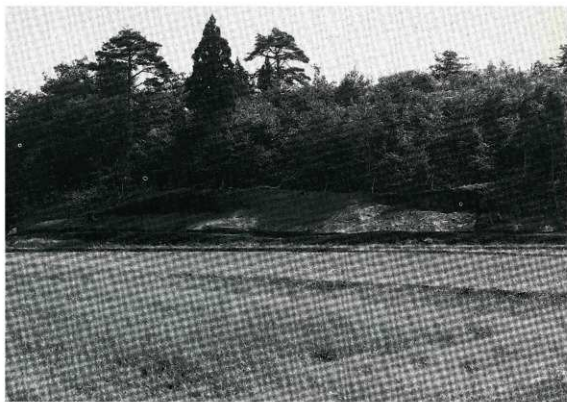
調査前遠景



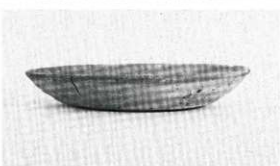
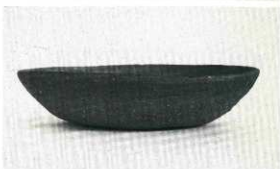
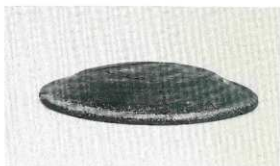
調査前近景



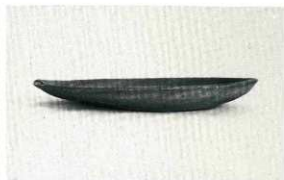
3号竈址灰原セクション



調査終了後近景



出土遺物



出土遺物

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 3

鉢伏2・3号窯址灰原発掘調査概報

1990年3月20日 印刷

1990年3月31日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

印刷 西川印刷株式会社

